

研究計画を観測の立場から考えることはかなり難しい。研究計画と観測計画はしばしば混同して考えられることがあるが、勿論、研究計画がたてられた上で、観測計画がたてられるべきである。WCRPの一環としての南極観測が、今後も順調に発展していくためには、このような当り前のことがしっかりと行われることが必要であるが、南極CRPの雲と降水の観測では、観測する人間とデータ解析する人間が必ずしも同じではないため、このことは意外な位に難しい。

最近10年間の日本気象学会における極地関係の論文発表数をみると、1年間の平均論文数は全体の2.7%に過ぎない。しかも、それらの論文は、南極で越冬観測をした人が日本に帰ってきて集中的に発表したものが多い。勿論、周囲のバックアップ、討論があったから実現されたのではあるが、学会での発表論文でみる限り、南極観測は、計画作成、観測実施、データ解析、成果発表がかなり個人の寄りに依存している傾向がある。WCRPとしての南極観測においては、このような傾向は決して望ましいことではなく、広い分野の多くの研究者の討論のもとで研究が計画され、それにできる限りふさわしく準備した観測がなされ、観測者のpriorityが十分考慮された上でいろいろの立場の人によってデータ解析がなされるような体制が望ましい。これまで、そのような体制で計画はたてられてきたが、WCRPを意識する限り、さらに効果的な体制が望まれる。

雲と降水に関連した研究課題としては、水のサイクル

の一環としての雲と降水の研究は興味ある課題の一つであろう。10年後のWCRPの計画としてGlobal Energy and Water Cycle Experiment (GEWEX)が現在検討されているように、WCRPにおいて水のサイクルの研究が今後ますます重要視されていくと考えられる。地球規模の水のサイクルの中で南極をどう位置づけるかは、研究の立場により異なるであろうが、regional cycleとしての南極の水のサイクルもまた大変興味深いものであろう。たとえば、雲、降雪量の分布の変動、低気圧活動と内陸部への水の供給、海水のevolutionの水のサイクルへの影響、南極域の効率の良い降雪形成、成層圏の水のサイクルなども興味深い課題例である。

このような研究の一つのポイントは、今後ますます進展していく衛星とコンピュータの利用である。現在、水蒸気、降水量、積雪面積、その他水のサイクルに関係した衛星観測技術は大きな話題であり、それらの可能性、具体化がいろいろと検討されている。一方、将来のコンピュータの発展は、高分解能の水のサイクルの数値モデリングを可能にするであろう。また、水のサイクルの観測データは、多種多様で、分解能もばらばらの膨大なものであることが予想され、それらのdata assimilationとmanagementにはコンピュータおよびコンピュータモデルの利用が不可欠になってくる。WCRPとしての南極の雲と降水の研究計画を、水のサイクルの立場から、10年位先を考えてみて、研究体制も含めてその準備をしていくことも大事なことであろう。

## 京都大学超高層電波研究センター共同利用研究公募のお知らせ

当センターでは、現在昭和63年度前期(63年4月~同9月)の共同利用研究課題を公募中です。

共同利用研究の中心的設備となるMUレーダーは中層・超高層大気観測用VHF帯大型ドップラレーダーです。また、他に共同利用に供される設備としてはイオンゾンデ、二周波共用型マイクロ波レーダー、ラジオゾンデ等があります。

利用を希望される方は、下記に御問い合わせ下さい。締切りは昭和63年2月10日です。

〒611 京都府宇治市五ヶ庄

京都大学超高層電波研究センター事務局

TEL. 0774-32-3111 内線 3340